山本太郎

詩のたのしみ

言葉の不思議

山本太郎

詩のたのしみ

言葉の不思議

詩のたのしみ
——言葉の不思議——
1985年4月15日　初版第1刷発行

定　価　1400円

著　者　山本太郎
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社 平凡社
東京都千代田区三番町5番地
郵便番号102　振替　東京8-29639
電話　東京　(03)-265-0451
東京　(03)-265-0455
(営業部代表)

印　刷　星野精版印刷株式会社
製　本　株式会社石津製本所

© 山本太郎　1985 Printed in Japan
不良本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい（送料は小社負担）

ISBN4-582-82805-1

詩のたのしみ——言葉の不思議

山本太郎

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装幀　やまもと　あかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

＊明治生まれの詩人＊

まどかなる　穴掘りて栖む
きりぎりす　おぢなき虫よ

森　鷗外

『うた日記』（明治四十年）の第三章「夢がたり」所収の一篇。ここには謹厳冷徹な鷗外とは別の一面を物語る愛の詩、心の乱れを伝える詩が集められている。例えば「わが歩む道のゆくてに／人あまた　穴ほりてをり」（わが墓）の如きは同時代の新体詩とは異質のデモーニッシュな感覚にみち興味深いが、引用の「蟋蟀（きりぎりす）」も秘かに囲う若き乙女を想う中年男の心情か。

〝おぢなき〟は〝びくびくしている〟の意。細い触角をのばし「物来れば　しざりかくろふ／隠処（かくれが）の　睫（まつげ）長き子」とつぶやくようによびかける鷗外は、きりぎりすに託し、明らかに恋心を歌っているのだ。「人来れば　かくろへ入りて／我を待ち居り」とよみすすめばこれはもう万葉の昔から今なお纏綿（てんめん）と続く男女の切ないしがらみである。（一八六二―一九二二）

山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

国木田独歩

「嗚呼山林に自由存す／いかなればわれ山林をみすてし」。四行四連の第一節。いま流行の森林浴ではないが新緑の森をゆけばまずこの詩句が想われる。若くしてキリスト教の洗礼をうけた独歩は二十五歳、佐々城信子と熱烈な恋をして新天地開拓を夢み、まず独り北海道へ渡った。信子の親の反対にあい信子渡米のしらせをきいた彼は急いで内地へ帰るが結婚生活は長くは続かなかった。「山林をみすてし」に痛恨がにじんでいる。

この詩は田山花袋、柳田国男などと詩集『抒情詩』を刊行した二十七歳の作だ。札幌の北、歌志内の詩碑は今も美しい山林にかこまれている。「自由存す」は自然主義者独歩にふさわしい。僕がよく散歩する玉川上水に「武蔵野」第六章冒頭の小さな橋、桜橋がかかっている。（一八七一―一九〇八）

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ

島崎　藤村

千曲川は小諸を過ぎると勢いをまし岩壁の間をえぐって下る。「緑なす蘖蔓は萌えず／若草も藉くによしなし」。終戦直後衰弱した体に胸一杯の感乱を抱え、僕は一人の復員兵としてその河原をさまよっていた。そう遊子、「佐久の草笛」を幻に聴く旅人だった。浅間の噴煙が淡く東へ流れ「あたゝかき光はあれど／野に満つる香も知らず」と藤村の哀歓を秘かにくちずさんでいた。最後の詩集『落梅集』（明治三十四年）のこの一篇。近代詩の絶唱とも言うべき格調と「千曲川旅情のうた」の一節がわずかに心の慰めだった。

「昨日またかくてありけり／今日もまたかくてありなむ／この命なにを齷齪／明日をのみ思ひわづらふ」

〝朝はふたゝびここにあり〟と歌い出す藤村の明るさも好きだが、濁酒もないまま、山羊の乳を飲み、僕はぼんやり巻雲を眺めていた。（一八七二―一九四三）

寒い。
太陽は何処を歩いてゐるか分らない。
光は空一面に澱(よど)んでゐる。

河井　酔茗

戦前一度だけおめにかかった。丸眼鏡をとがった鼻の先にのせた長身痩軀(そうく)の老詩人であった。詩誌「文庫」の投稿欄を受け持ち白秋、露風、横瀬夜雨、川路柳虹などの俊才を次次と世におくりだした名伯楽という知識しか持ち合わさなかった僕は酔茗の詩そのものは古風な新体詩ときめつけ関心を持たなかった。

しかし処女詩集『霧』(明治四十三年)を一読し、その口語自由詩の即物的な筆法にふれ不明を恥じた。「太陽は何処を」の一行。「息が白い。／往来(ゆきき)が白い。／曝(さら)されたる家よ」とつづく鋭いタッチ。そして飢えて凍えた男が木片(きぎれ)を求め冬空をさまよう情景につづき「火！と叫んだ。酒と女と火と」とたたみかける語勢は大正、昭和と表現域を拡げていった現代詩に直結するものだ。(一八七四―一九六五)

われ山上に立ち、深い霧に自らを失ふ時、
われその柱となつて、宇宙に

野口　米次郎

「作られたりと思ふ……」。イエスの〝山上の垂訓〟を想起してもいい。古来、人々にとり山の高みは宗教の対象であった。そこは神の座。低地に住むものはみな山稜を仰ぐ。雲はゆき星座は巡り「天地創成の始め、深さ否な深さのない深さの上に立つ神は、則ちわれにあらざるか」と夢想する。いや、山頂に立てば実感さえ身に迫る。

「山のあなたの空とおく／幸い住むと……」（カール・ブッセ）という心境はまだ水平的でセンチメンタルだ。「深さのない深さの上」でなければ山を媒体にした人と天との呼応は生まれない。「深い霧に自らを失ふ時」がポイント。人生の起伏をゆくものの惑いでもあるのだ。人間くさい悩みと、「われその柱」と直立する神性へのめざめ。双方が入り乱れている。（一八七五―一九四七）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

牡蛎の殻なる牡蛎の身の
かくもはてなき海にして

蒲原　有明

「独りあやふく限ある／そのおもひこそ悲しけれ」と続く七五調の象徴詩。難解な漢語を多用した明治期の詩のなかでは比較的平明な作品だ。固い殻に閉じこもる牡蛎によせて人間の孤独を歌ったところに近代の憂愁がうかがえる。たとえ暁に映える岩礁に住んでも、厳に守られても、そしてまた夕焼けの海で「遠野が鴿の面影に／似たりとて」なんになろう、と詩人は嘆く。

波音を子守唄に、海を揺籃にみたてた詩はあるが、牡蛎にとって海は「いたましきかなわだつみの」であり、「ふかきしらべのあやしみに／夜もまた昼もたへかねて／愁にとざす殻のやど」なのだ。ひとたび嵐が吹けば「海の林」はさけ「朽つるままなる牡蛎の身の」殻は無残に砕けてしまう。（一八七六―一九五二）

夕凍の
小野や、――伏目に
さしぐみし
日はみまかりぬ。
左視右顧

薄田　泣菫

倉敷市の生まれ。藤村、晩翠にはじまる新体詩は七五調の朗詠風に好んで物語を織りこんだが、一般に象徴詩人と評される泣菫においても例外ではない。しかしボードレールなどのフランス象徴詩とは異なり、日本的情緒を逍遥する詩境だ。引用は第五詩集『白羊宮』（明治三十九年）所収「さざめ雪」の一節。細雪のふる夕まぐれ、うつむき加減に野末をゆく旅人の姿を想いうかべるといい。古語癖があり馴染みにくいが、この詩は平易だ。「あな細雪、／常楽の／宮とめあぐみ、／ものうげの／旅や、はつはつ」。「とめあぐみ」は〝尋ねあぐねて〟、「はつはつ」は〝なかなかゆきつかない〟の意。「常楽の宮」はいかにも古めかしいけれど「はつはつ」の語感が美しい。（一八七七―一九四五）

二歳になる可愛いアウギュストよ、
おまへのために書いて置く、

与謝野　晶子

「おまへが今日はじめて／おまへの母の頬を打つたことを。／それはおまへの命の／自ら勝たうとする力が――／純粋な征服の力が／怒りの形と／痙攣の発作となつて／雷光のやうに閃いたのだよ」

わが児に贈る「アウギュストの一撃」の冒頭だ。五十二行の詩のなかで晶子は「征服の中枢は愛である」としるす。成長の過程で経験する「嫉妬と、卑劣と、嘲罵と、／圧制と、曲学と、因襲」に打ち克つために「それだ　その純粋な一撃だ、／その猛猛しい恍惚の一撃」を忘れず「おまへは、他日、一人の男として」立て、と。晶子には「その母の骨のことごと砕かるる呵責の中に健き児の啼く」という短歌もあるが、二歳児の「獅子の児のやうに打つた」無意識の一撃に生命力の宣言を直覚し、歓喜する母の、炎たつこの詩。その化粧なきストレートな勁さこそ詩の原形だ。（一八七八―一九四二）

己が借金の為めにとられた杉山が
真黒になつて茂つてゐる

野口　雨情

「己が売つて了つた田の中で／水鶏が鳴いてゐる」に始まる連作詩「己れの家」の一節。雨情は早稲田詩社に参加、口語自由詩を書いた。引用は田畑を手放した貧農のやり場のない悲しみを描いたもので、茨城の小村に生まれた彼自身の姿をうかがうことが出来る。「真黒になつて茂つてゐる」の一行は、「山の方を見ないで」背を丸め足ばやに通りすぎる男の暗い心境を直截に現す良い表現だ。水鶏の鳴く田圃も「青々と麦が育つてゐる」かつての「己が家の畑」も「悲しくなつて」見ないで過ぎ「もうこの村に居られない」と嘆く農夫。「己は何処へ行かう／何故己は死ねずに／この村に居るのだらう」とうろつく百姓。

連作は「畑ン中の豆ン花」が「べろりと咲いてござりやあす」といった陽気な方言詩も含み、雨情の多才ぶりを示している。（一八八二―一九四五）

これはもう駝鳥ぢやないぢやないか。
人間よ、
もう止せ、こんな事は。

高村　光太郎

もう止せ、人間よ――と叫びたいこと一杯の世のなかだ。『智恵子抄』の愛の清らかで切ない交歓も読者の心をとらえるが、「猛獣篇」と名付けられた一連の〝否定〟の詩を僕は好む。例えば「ぼろぼろな駝鳥」は次のようなアングルでストレートに人の心に食いこむ。「何が面白くて駝鳥を飼ふのだ。／動物園の四坪半のぬかるみの中では、／脚が大股過ぎるぢやないか。／頸があんまり長過ぎるぢやないか」

アフリカの自由の天地を奔走する駝鳥の野性の肯定。個の自由を奪う理不尽な力の否定は光太郎の生涯を貫くヒューマニティーだ。歯に衣をきせたような昨今の軟弱な詩を読むにつけ、骨太の気風が魅力的だ。「駝鳥の眼は遠くばかり見てゐるぢやないか。／身も世もない様に燃えてゐるぢやないか」（一八八三―一九五六）

をんなが附属品をだんだん棄てると
どうしてこんなにきれいになるのか。

高村　光太郎

詩集『智恵子抄』（昭和十六年）所収の一篇。妻に精神異常があらわれたのは昭和六年のことだから、彼女の死（昭和十三年）まで光太郎の献身的な愛はつづくことになる。満州事変、上海事変など世情がしだいに悪化する時代でもあった。

光太郎には「元素智恵子」という詩もあるが、正気でも狂気でもない別の次元に気化してゆく智恵子は光太郎にもとらえ難い存在だったのか、とも思う。

「見えも外聞もてんで歯のたたない／中身ばかりの清冽な生きものが／生きて動いてさつさつと意欲する」のだ。僕は縁あって彼女の切紙を一冊にまとめたことがあるが、その色感、構成どれひとつとっても全く狂いがなかった。「あなたが黙つて立つてゐると／まことに神の造りしものだ。／時時内心おどろくほど／あなたはだんだんきれいになる」（一八八三―一九五六）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo